

畏友 恒川武敏君を憶う

大 橋 誠 宏

(京都・報恩寺閑樓)

恒川君と会談してから十日も経たないのに訃報を聞いて、驚きと痛恨の極に沈まざるをえなかった。これほど世の無常を切々と身を感じたことは近來なかった。

平素、物にこだわらず飄々としているかに見え、尚且つ常に節を曲げず、論理整然、静かに語る君の面影が彷彿として目に浮んでくる。

昭和十一年、君と佛専で袂を分つてから以来、まさに国家社会は混沌の時代となり、我々も苦辛酸胆の世情にあえいでいた頃、突然君から貰った長文の手紙には子を想う親の情がしん／＼と語られていて、その愛情の深さに打たれたこと、

君が京都市民生局の社会福祉事務所に栄進し、その祝賀の席からの帰途、恩師恵谷先生（佛教大学学長）と共に、君

の自坊称念寺に訪れて、酒を交わしつつ談論数刻、学生時代の懐旧談に夜を更かしたことをも、その温い友情として憶い出している。

北海道で催される同窓会に同行を楽しんでいたのに、図らずもその同窓会が君の追悼会になろうとは。

生前の君を偲んで仏教者として社会福祉については如何にあるべきかを考えてみたい。我々自身の反省として。

佛教大学に社会福祉学が開講されるやその草分けとして重責を帯び、西化されるまでその生涯を通して社会福祉学に専念精進された功績は絶大である。

大乘菩薩の精神は智慧と慈悲に象徴されるが身を捨てても一切衆生を救済せずにはおかまいとする菩薩行こそ仏教精神

の究極であらう。

日本で仏教精神を完全に理解した最初の人は聖徳太子である。太子の業績の中でも十七条憲法の發布や三経義疏の著述はこの事がよく示されている。日本書紀に示す片岡山の説話や四天王寺境内に設立された敬田院、悲田院、施薬院、療病院が人々の福利を願う仏教精神の実践であることは勿論である。爾来仏教者の中で利他の精神を实践した人々を考えてみれば、奈良時代で挙げ得るのは光明皇后の千人風呂の伝説、道昭、行基の社会福祉事業、法光尼の布施屋建立、和氣清麻呂の姉法均尼（広虫）の孤児救済、永観の囚人教誨、平安朝に入っては空海の地方開発への貢献や福祉事業の実践も忘れることができない。鎌倉期に入っても覚盛、頼尊、忍性が非人、乞食の救済に、医王如来と尊敬された忍性の業績の素晴らしさ、古来の数多い慈悲行を身を以て実践した仏教者のひたむきな行為にはただ／＼頭の下る思いである。施粥をして窮民を救った室町期の願阿弥陀仏や江戸期の鉄眼の事蹟も忘れることができない。

明治維新後は新しい組織も次第に発達し、仏教徒の社会福祉事業は活発になってきたが、その基礎となるものは何とい

っても各人の心に菩薩行の教を理解させ自覚させることが肝要であらう。救貧、医療、老人ホーム、養育院の創設、囚人教誨、保護司として免囚保護など所謂社会福祉事業の活動は今後いよいよ幅広く、国内は勿論全世界人類の幸福と平和に身を捧げる程の覚悟と実践活動に徹することが必要である。終戦後の混乱期にいち早く社会福祉学に取り組んでその生涯を捧げた恒川武敏君に敬意を表したい。